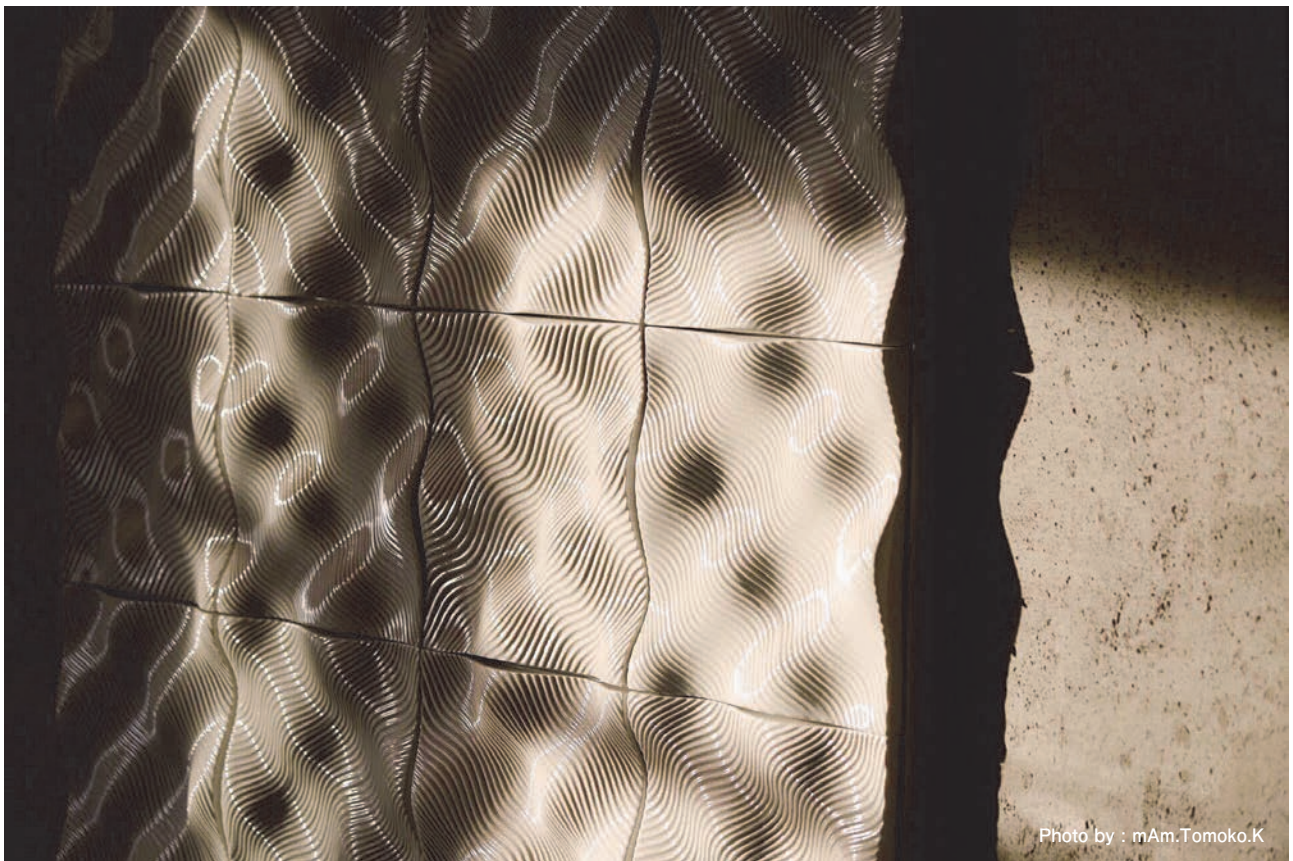


[制作記録]

光の見え方を創る - 陶磁壁面 個展の作品より -

Creation of Light Appearance - Ceramic Wall Works from Works of Solo Exhibition -

池 田 晶 一
IKEDA Shoichi



(写真1) 作品の部分

1. はじめに

私たちが見ているものは何だろうか？ 形であろうか？ 色であろうか？

いわゆるものを見ることを構造から捉えると、それは網膜に映った光の像を脳が理解していると言うことである。

長年、私は作品がどの様に人の目に見えるのか？

とすることを考え自らの作品に向かい合ってきた。

昨年2016年11月、ギャラリーマロニエ（京都）にて個展を開催した。また引き続き、同作品を2017年5月にギャラリー一点（金沢）にて個展を開催し、異なった空間での展示を行った。

これまでの私の関心の流れの中で、「作品の表面に現れる光の陰影の変化」をテーマに制作制作を行っている。これは私の作る作品の表面もしくは全

体像を、どのように見る人に見える様にするかということでもある。

陶磁器における作品の表面の様子や会場などに設置した時の光の印象は、実際その場で展示するまでは判らないことが多いが、これまでの経験を踏まえ制作に挑んだ。今回2つの会場で作品を展示できたことは、会場によって異なる光のあり様があり、それらを作品の表面がどのように受け止めるかという観点で興味深い試みとなった。

本稿では作品を通して見ている背景や全体の印象について、そしてギャラリーマロニエの展示を中心に作品の解説を述べてゆく。

2. 作品を取り巻く世界、もしくは環境の中に作品を位置づけること

私は自身の作品を、環境芸術として捉え制作をしている。

私がここで言う環境芸術とは、既存の、もしくはこれから出来てくるであろう建築や空間と共にある造形物のことである。簡単に言えば、建築や空間の装飾としてのものである。

作品とは、多くの場合独立した作品として存在し、その中に意味を持たせることが多い。

私は自身の作品を環境芸術として捉えているが、それは環境デザインや空間デザインといった意味も含んでくる。また、私自身は工芸作品として実際の素材に関わり、素材は技術を吟味しながら制作に挑むが、工芸とは生活空間や人との距離感の中にあるものを創り出すことと私自身は考えている。鑑賞することも含めて作品を使うことをイメージし、私自身の作品が空間や人にどのように作用するかを考えながら制作と向き合っている。

作品が置かれる世界は、作品のみが存在するわけではなく、場として、空間があり、ものがあり、人がある。その関係性の中で自身の作品の位置付けを考えることが私の仕事である。

特に私の作品はその表面に多様な光の陰影を捉える。場の中で私の作品は空間にある光の陰影の奥行き

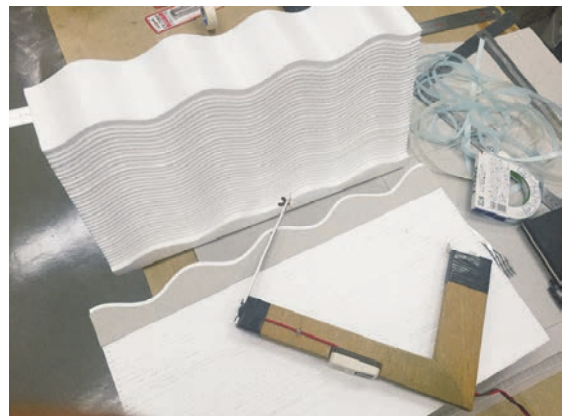
を見るものに提示する装置のような位置付けを持つ。

3. 作品の制作

作品の見せ方として、今回壁面の作品を中心に制作することとした。

作品の表面は一本の波線をもとに発泡スチロールをニクロム線ヒートカッターで切断し展開してゆく。それにより表面に細かな凹凸を作り出し、作品表面に当たる様々な光の状態を捉えられるようにデザインする。

制作の技法はニューボーン（磁器）、及び半磁器土の泥漿鑄込みによるものである。



(写真2) 発泡スチロールのニクロム線ヒートカッターでの切断



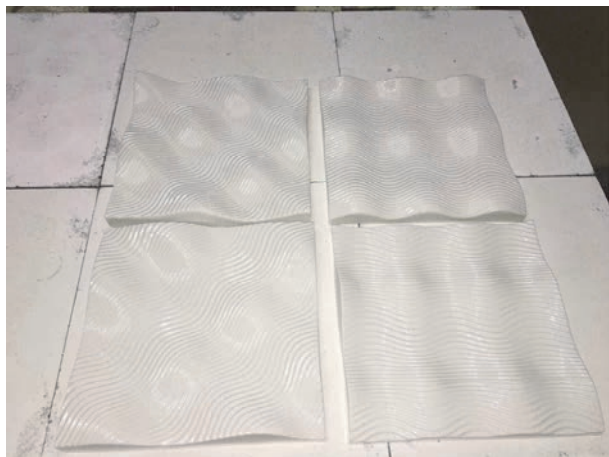
(写真3) 発泡スチロールのニクロム線ヒートカッターでの切断



(写真4) カットした発泡スチロールを再構成



(写真5) 石膏原型と鋳込み用石膏型



(写真6) 焼成後の作品パーツ 〈ニューボーン製〉

表面には透明釉を施し、光の反射を捉えることも意図した。

以上（写真2～6）にある行程で制作を進めた。半磁器による作品（有彩色）は、表面に色ガラス釉を施し1230度で焼成した。赤色の作品のみ締め焼きの後に楽焼用の低温釉を施し800度で焼成した。

焼成後は、作品の配置を決めパネルに仕立ててゆく作業となる。

4. 見えることを創る

作品はパネル状になり一応の完成を迎えるが、今回の作品の場合は、会場におけるレイアウトと、照明の調整が重要な意味を持つ。

その空間の光の有り様とライティングの調整は、作品の表面に現れる光の状態を作り出す最終作業となる。

パブリックスペースなどに恒久的に設置する作品は当然のことであるが、ギャラリーにおける個展であっても事前の展示計画は私にとって大切なことになる。あらかじめ会場の壁面の幅や天井高、外光が入る窓の有無、使用できる照明の種類や位置関係の頭に入れながら作品の大きさや数などを決定してゆく。

最後には現場において細かな調整となるが、制作中に作品の表面に現れる光の反射や陰影をイメージしておく。時には現場で思いがけない効果を体験することはある。しかし、見えることを創るということは、あらかじめ場を読み取ることと同時に、実際に作成する造形物のありようを重ね合わせ、全体像をイメージすることである。

後の作品画像で造形の形作る部分と、作品の表面に現れる光の様相を見てもらえればと思う。光の様相をコントロールするためにどのような表面を作るかということが私の制作上重要な点である。また、作品の見え方を考えると、周りの空間の中で作品をどのように位置付け機能させるかという点が不可欠なことなのである。

5. 展覧会データ

会場：ギャラリーマロニエ

所在地：京都市中京区河原町通四条上る塩屋町332

会期：2016.11.29(火)～12.4(日)

会場：ギャラリー点

所在地：石川県金沢市入江2丁目243

会期：2017.5.19(金)～5.28(日)

6. 終わりに

私の作品は、会場に並べるのが本来の形ではない。

今回個展として、展覧会を開催したが、本来私は自身の作品を人々が生活する空間の、まさにその現場に時間とともにあり続けることを願う。私の作品は彫刻の様に鑑賞を主たる目的とするものではな

い。空気や光のように存在する印象をそこに提示したいと考えるのである。

日本の古い工芸の中では、建築や道具や建具の中に、例えば障子や襖、壁そのものに中に浸透した美を作り出している。私の目指すものはそういう所にあるのかもしれない。

今後も自身の美のあり方を様々に模索してゆきたい。

7. 謝辞

今回、本展覧会においてフォトプランナー mAm. Tomoko.Kさんに撮影及び画像を提供頂いた。この場を借りて御礼申し上げます。

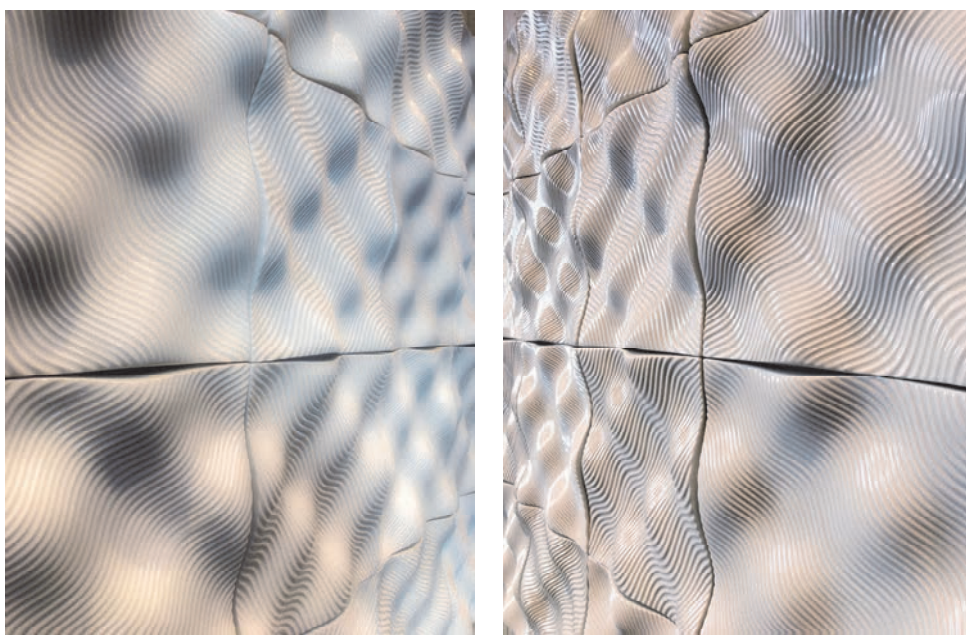
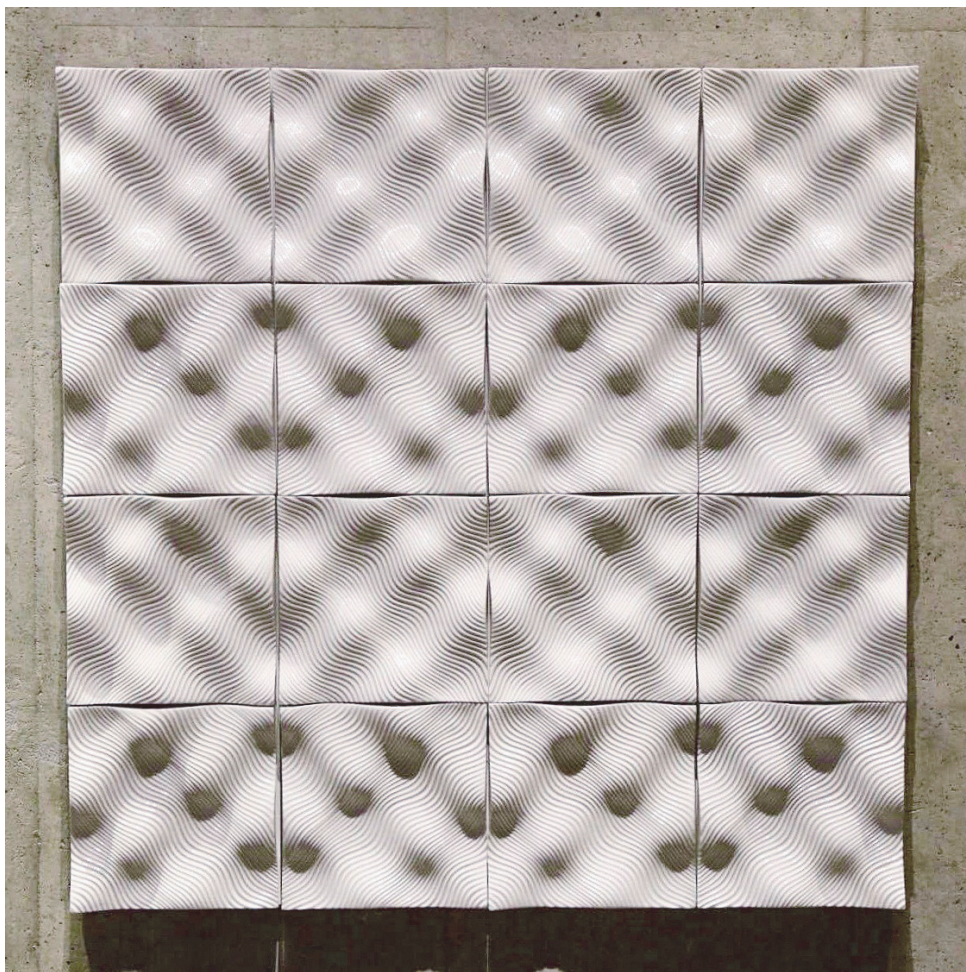
(いけだ・しょういち 工芸科／陶磁)

(2017年11月7日 受理)



Photo by : mAm.Tomoko.K

一本の波線からなる形xiv (部分写真)



一本の波線からなる形 x vii w1205×h1205×d55mm ニューボーン（磁器）、透明釉、1240℃（酸化焼成）



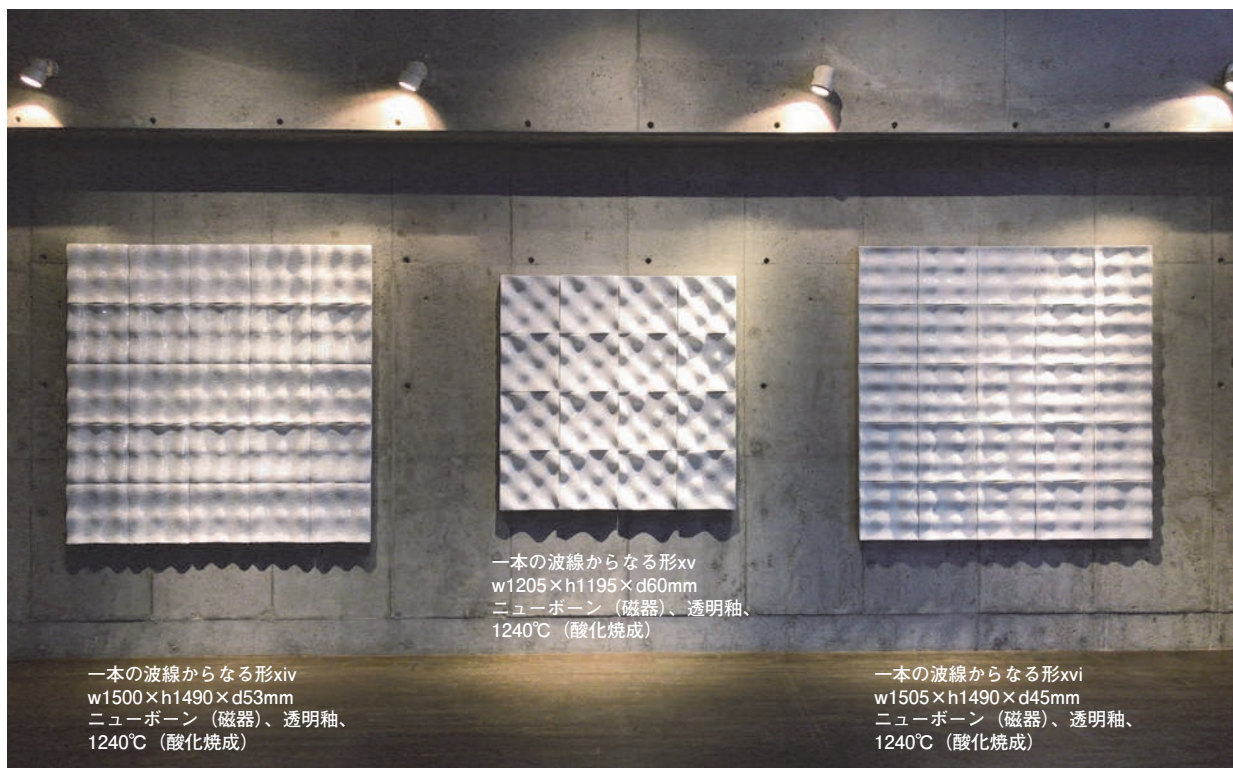
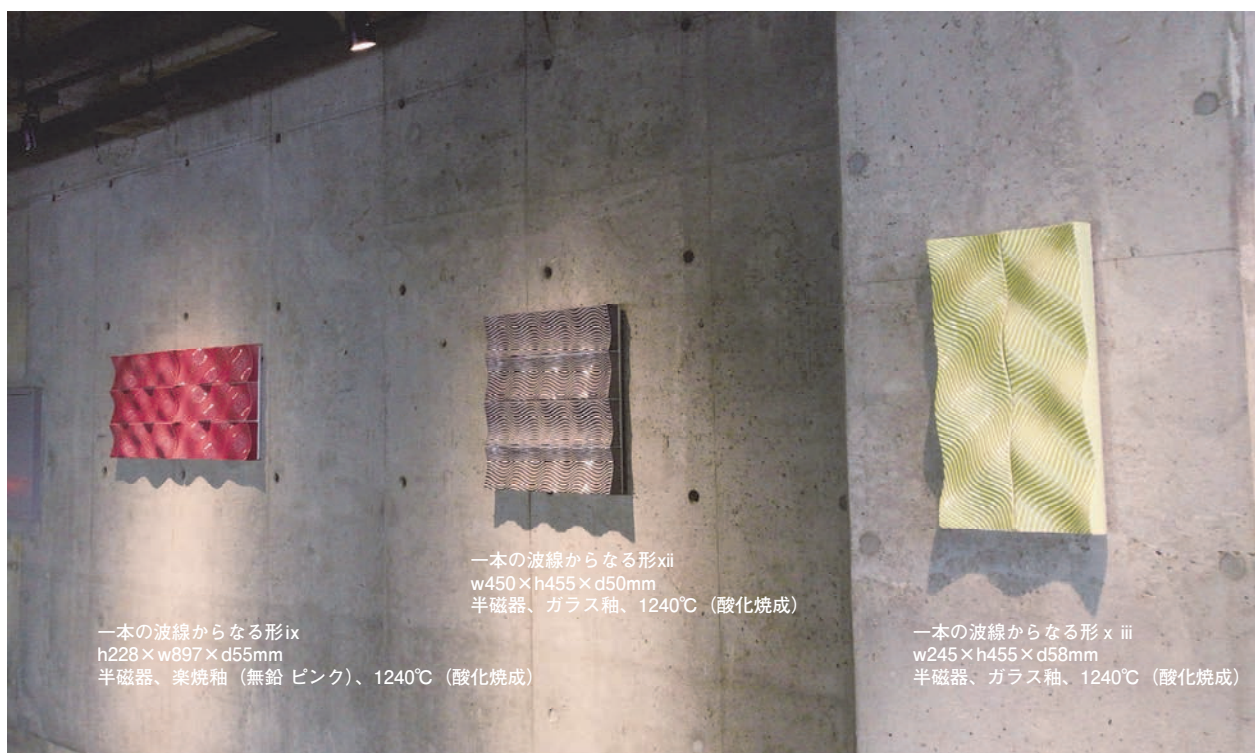




Photo by : mAm.Tomoko.K



一本の波線からなる形ix
h228×w897×d55mm
半磁器、楽焼釉（無鉛 ピンク）、1240℃（酸化焼成）

一本の波線からなる形xii
w450×h455×d50mm
半磁器、ガラス釉、1240℃（酸化焼成）

一本の波線からなる形x iii
w245×h455×d58mm
半磁器、ガラス釉、1240℃（酸化焼成）





一本の波線からなる形 iv
w600×h600×d60mm
ニューボーン（磁器）、透明釉、1240℃（酸化焼成）